

# ウイグル語訳『妙法蓮華経玄賛』の研究状況と課題

金 炳坤

## 1 はじめに

七世紀末頃、基によって著された『妙法蓮華経玄賛』（以下『玄賛』）に比定される、ウイグル語訳テキストの存在、並びにその詳細については、下記の百濟康義氏による一連の研究において明らかにされたところである。

- ①百濟 [1980]: 「ウイグル訳『妙法蓮華経玄賛』(1)」（『仏教学研究』第36号、龍谷大学仏教学会、1980年3月、pp. 45-65）.
- ②百濟 [1983]: 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」（護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983年6月、pp. 185-207）.
- ③百濟 [1988]: Uigurische Fragmente eines Kommentars zum *Saddharmapuṇḍarika-Sūtra*, *Der türkische Buddhismus in der japanischen Forschung*, herausgegeben von Jens Peter Laut und Klaus Röhrborn, In Kommission bei OTTO HARRASSOWITZ · WIESBADEN, 1988, pp. 34-55, 102-106.
- ④百濟 [1990]: 「ギメ美術館所蔵『妙法蓮華経玄賛』ウイグル訳断片」（『龍谷紀要』第12巻第1号、龍谷大学龍谷紀要編集会、1990年8月、pp. 1-30）

本研究は、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班による研究プロジェクト「『妙法蓮華経玄賛』の漢文テキストとチベット語訳テキストの比較研究」の付随的な研究としてその一角を担うものである。それはつまり、百濟氏が「このウイグル訳玄賛の問題は、チベット訳本の問題、すなわち数多い法華註の中から、なぜ玄賛だけが**九世紀前半**<sup>(1)</sup>には省訳とはいえチベット訳され現存しているのかという問題と絡め合わせ論じる必要がある。」(百濟[1983: 203])と、今後の展望なり課題について述べているように、ウイグル語訳テキストの研究は、当該研究プロジェクトを遂行する上で、決して欠くことのできない、つねに一对として扱われるべき論題であるからである。したがって以下では、その基礎的研究として、百濟氏による上記の四つの論考を総括し、ウイグル語訳『玄賛』に対する理解を深めるとともに、その諸相を把握することに努めたい。

## 2 資料編

百濟氏による資料の整理と研究の経緯については、氏の最終稿のはじめに（百濟 [1990: 1-2]）において集約されているため、以下にその全文を引用し、必要に応じて他稿より補足を行う<sup>(2)</sup>。

## 2.1 百濟 [1990: 1-2] より

〔資料Ⅰ。 第二次ドイツ探検隊 (1904-1905) はトルファン地方ヤルホト地区【Turfanの西方 Yaxoto・百濟 [1980: 51]】で一卷のウイグル字**卷子本** (29×212cm) を収集した<sup>(3)</sup>。この卷子 (T II Y 21) には表裏に別筆のウイグル字で別個の仏典的内容が書写されており、これを解読した W. Bang と A. Gabain の両氏は、表裏いずれの内容についても未同定ながら、とりあえず試訳的研究を写本一部の図版を添えて1931年に発表した<sup>(4)</sup>。現在、この写本は西ベルリンの Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz【プロイセン文化財国立図書館】に Mainz 732の番号の下にあり、四つに裁断され各々ガラス板に挟まれ保管されている。筆者は、この卷子本の裏面【0<sup>(5)</sup>-129行】が慈恩大師・基 (632-682) の著した『玄賛』冒頭部の翻訳であることを見出し、ウイグル語本文の再読研究と写本裏面の全図版を1980年に発表した<sup>(6)</sup>。

その後、種々のウイグル文資料を調査整理するうち、さらに『玄賛』の二種類の写本【資料Ⅱ甲・乙】を見出し得た。

資料Ⅱ。 一種の写本は、ウイグル字楷書体で表裏各面8行書かれる**貝葉形紙本**で、完葉の寸法は30.0×14.0cm前後である。この種の写本は、ストックホルムのEtnografiska Museet【民俗学博物館】所蔵のスエーデン隊将来資料【ヘディン・コレクション・百濟 [1983: 186]】中に完葉が**1葉**【資料Ⅱ甲】、故羽田亨教授保管の焼付写真(現物写本の所蔵者は不明)中に**32葉**【資料Ⅱ乙】見出される<sup>(7)</sup>。これら計33葉は、もともと同一本に綴じられていた葉が離散したものである。

資料Ⅲ。 他の一種の写本は、同じく故羽田教授の写真資料中に見出されるウイグル字楷書体による**貝葉形写本断片2葉**であって、もと片面20数行は書かれてあったと推定できる。現物写本の所蔵者は不明。

筆者は1983年、上記資料Ⅱ・Ⅲの計35葉の概括的紹介を行うとともに、4点の写本についてウイグル語本文の解読研究を発表し、ストックホルム所蔵資料1葉の図版を添えて公刊した<sup>(8)</sup>。数年後、この論文をドイツで刊行したいという依頼があった。本文に一部手直しを加えたい箇所もあったので承諾し、やがて関連資料の調査研究のため恵与された在外研究期間(東西ドイツ・1986年度)中に翻訳の最終点検を完了し、解読研究した写本4葉の全図版を添えたドイツ語版が1988年に刊行された<sup>(9)</sup>。

このような経緯の下で、今またウイグル訳『玄賛』を採りあげるに至ったのは、上記資料Ⅱと同種の写本<sup>(10)</sup>を新たに見出したことに因る。この新出の写本とは、その存在を1983年の論文では6葉と報告【百濟 [1983: 202]】し、当該論文の1988年ドイツ語改訂版ではその枚数を7葉に改めた【百濟 [1988: 52]】、パリのギメ美術館に蔵される資料【資料Ⅱ丙】である。(百濟 [1990: 1-2]).

## 2.2 資料総覧

ここでは、百濟氏によって現在までに判明したウイグル語訳『玄賛』の3種43点に関する書誌情報並びにその研究状況について、以下の十項目に分けてまとめておく。

- ①通し番号(Nos. 1-43：優先順位は資料の種類及び漢文テキストと対応する品順に従う)、  
 ②資料区分(資料I：1点、資料II：40点〔甲：1点、乙：32点、丙：7点〕、資料III：2点)、  
 ③現所在地、④写本(撮影)番号、⑤寸法、⑥形状・現形、⑦Leaf no. Vol-Fol. (資料IIのみ)、  
 ⑧漢文テキストとの対応関係(巻・品、比定)、⑨朱書き経文の有無(資料IIのみ)・『妙法蓮華経』(以下『妙法華』)との対応関係、⑩百濟論考での出典(Romanize・解説・図版)

No.	資料区分	現所在地	写本(撮影)番号	寸法(cm)
1	I	Staatsbibliothek zu Berlin	Mainz 732	29×212
2	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 48	unknown
3	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 56	unknown
4	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 64	unknown
5	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 62	unknown
6	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 55	unknown
7	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 A	30.0×14.9
8	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 51	unknown
9	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 58	unknown
10	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 B	29.5×13.7
11	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 69	unknown
12	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 54	unknown
13	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 44	unknown
14	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 50	unknown
15	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 C	21.0×13.4
16	II甲	Etnografiska museet (Stockholm)	Hedin Uig. Ms. No. 41	30.2×14.0
17	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 49	unknown
18	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 D	30.0×13.0
19	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 75	unknown
20	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 E	30.0×13.9

21	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 61	unknown
22	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 46	unknown
23	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 47	unknown
24	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 F	28.0×14.0
25	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 45	unknown
26	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 73	unknown
27	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 57	unknown
28	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 65	unknown
29	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 60	unknown
30	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 59	unknown
31	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 67	unknown
32	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 63	unknown
33	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 52	unknown
34	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 68	unknown
35	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 70	unknown
36	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 53	unknown
37	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 66	unknown
38	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 71	unknown
39	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 72	unknown
40	II乙	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 74	unknown
41	II丙	Musée Guimet (Paris)	No. 63322 G	29.5×13.8
42	III	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 34	unknown
43	III	Unknown (Haneda Uig. Photo)	No. 29	unknown

No.	形状・現形	Leaf no. Vol.-Fol.	『玄賛』(T. 34)	
			巻・品	比定
1	卷子本(129行, 現在四分), 草書体	none	一末・序品	662a20-c5
2	貝葉形紙本(表裏各面8 行), 楷書体, 上部 $\frac{1}{3}$ 存	IV-36	二末・序品	688b29-c6
3	上部 $\frac{1}{3}$ 存	IV-60	二末・序品	689c9-13
4	中部 $\frac{1}{2}$ 存	missing	二末・序品	689c29-690a4

5	中部½存	missing	二末・序品	690a4-6
6	上中部¾存	missing	三本・方便品	695a19-24
7	上部両端の一部を欠く	IV-291	三本・方便品	cf. 695a18
8	上中部¾存	IV-309	三本・方便品	695b19-22
9	上中部¾存	V-17	三本・方便品	696b22-28
10	ほぼ完本	V-77	三本・方便品	700b3-8
11	下部¼存	missing	三本・方便品	700b23-27
12	上中部½存	V-86	三本・方便品	700c17-20
13	左二行欠	unknown	三本・方便品	701c13-15
14	上部¾存	V-115	三本・方便品	703a9-16
15	上部過半分を欠く	missing	三末・方便品	706c7, 707a3, 7, 10
16	完葉	V-182	三末・方便品	706a21-25
17	上部¼存	V-209	三末・方便品	707b11-17
18	上部右端を欠く	V-212	三末・方便品	707b26-c3
19	上左部欠	[V-213]	三末・方便品	707c2-9
20	上部右端を欠く	V-226	三末・方便品	708b2-8
21	中下部½存	[V-227]	三末・方便品	708b6-9, 14, 27
22	上部¾存	[V]-256	三末・方便品	709b16-18
23	上部¾存	[V]-264	三末・方便品	709c21-28
24	上部左端・下部を欠く	V-296	三末・方便品	711b23-28
25	上部¾存	VIII-103	五本・譬喩品	743c13-16
26	上部¾欠	missing	五末・譬喩品	744c21-24
27	上部¾存	VIII-163	五末・譬喩品	746a8-12
28	中下部¾存	missing	五末・譬喩品	746b25-29
29	上中部½存	missing	五末・譬喩品	746c21-27
30	中部¾存	missing	五末・譬喩品	748a20, 27, b3, 10, 21
31	中下部¾存	missing	五末・譬喩品	748c14-17
32	上中部¾存	missing	五末・譬喩品	748c24-25
33	上中部½存	?-?37	五末・譬喩品	750b18-23
34	下部¾存	missing	五末・譬喩品	751b24-29
35	下部¾存	missing	五末・譬喩品	cf. 756a13

36	上中部½存	missing	未比定	未比定
37	中下部¾存	missing	未比定	未比定
38	下部½存	missing	未比定	未比定
39	中下部⅓存	missing	未比定	未比定
40	中下部½存	missing	未比定	未比定
41	ほぼ完本	none	colophon	colophon
42	貝葉形紙本（表裏各面13行残存）、楷書体、左部½(?)存	none	六本・譬喩品	761c2-14
43	左部½(?)存	none	九本・安樂行品	824b29, c11, 17, 19, 21, 23, 26, 27

No.	有朱書經文・『妙法華』(T. 9)	出典（百濟 [19**] は省略）		
		Romanize	解説	図版
1	none	80: 52-57	80: 57-65	80: 45-48
7	none	90: 4-5	90: 5	90: 18-19
10	none	90: 5-6	90: 6-7	90: 20-21
15	6b16-25	90: 7-8	90: 8	90: 22-23
16	6b2-4	83: 189-90; 88: 40-41	83: 190-91; 88: 41-42	83: 206-07; 88: 102
18	none	90: 9	90: 9-10	90: 24-25
19	none	[90: 10]	[90: 10]	none
20	none	90: 10-11	90: 11	90: 26-27
21	7a5-8	83: 193-94; 88: 43	83: 194-95; 88: 44	88: 104
22	7a12-14	none	none	none
23	7a20-21	none	none	none
24	none	90: 12	90: 12-13	90: 28-29
25	11c21-27	none	none	none
26	12b7-11	83: 191-92; 88: 42	83: 192-93; 88: 42-43	88: 103
28	12b17-18	none	none	none
29	12b19-20	none	none	none
30	12b27-c6	none	none	none
31	12c8-11	none	none	none

35	[13c16-17]	none	none	none
36	未比定	none	none	none
37	未比定	none	none	none
38	未比定	none	none	none
39	未比定	none	none	none
40	未比定	none	none	none
41	colophon	90: 13	90: 13	90: 30
42	none	83: 195-96; 88: 44-45	83: 196-97; 88: 46	88: 105-06
43	[38c26-29, 39a5-9]	none	none	none

### 2.3 羽田写真資料の行方

以上の43点中、12点はすでに百済氏によって解読研究がなされている。よってその他の全体の約7割は、これからの研究が俟たれるところである。

ただし、未解読の31点すべてが羽田写真資料（資料Ⅱ乙：32点〔Haneda Uig. Photo Nos. 44-75〕中、Nos. 61, 73を除く30点、資料Ⅲ：2点〔Haneda Uig. Photo Nos. 29, 34〕中、No. 29の1点）に該当するわけであるが、問題は、資料の現物そのものは言うまでもなく、羽田亨氏が保管していたとされる写真集ですら、その所在の確認ができない、というのが現状である<sup>(11)</sup>。そのため解読研究にあたっては、資料の現物や写真集の所在を究明するところから始めなければならない。

ちなみに、百済氏は資料Ⅱ乙について「資料Ⅱ-甲と同一写本の離れと断定した」（百済〔1983: 186〕）、「もともと同一本に綴じられていた葉が離散したもの」（百済〔1990: 1〕）との見解を示している。すなわちこれらは同本離片であるということである。

確かに資料Ⅱ（丙を含む）が互いに重複するところを有しない（ただし、未比定の資料Ⅱ乙 Nos. 53, 66, 71, 72, 74の5点を除く）ことからこのことは裏付けられるのかも知れない。

さて、同本離片であるとするれば、当然、出土地もしくは現所在地が同じであるということが予想される。したがって、羽田写真資料の現物は、資料Ⅱ甲と同じくストックホルム民俗学博物館所蔵のヘディン・コレクションの一部ということにつながるわけであるが、氏は自らヘディン・コレクション中のウイグル写本を調査<sup>(12)</sup>していながら、この羽田写真資料の現物についてはなんら言及をしていないため、少なからず、ヘディン・コレクションではないということが推定できる。

また写真集については、羽田氏旧蔵の写真類を製本した『西域出土文献写真』（31冊）とい

う写真集が、ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）に所蔵されていることを知り得たため<sup>13)</sup>、当館に対し本書における当該資料の記載有無を問い合わせてみたが、31冊目に非漢文文献が少しばかり載ってはいるが、当該写真は見当たらないという回答であった。

### 3 研究編

百濟氏はウイグル語訳『玄賛』の解読研究を通じて、それに伴われる様々な問題について論及している。それらは大きく二つのテーマ、すなわち構成上の特徴と訳出の背景とに分かれており、主に百濟 [1983] において論じられている。

以下では、百濟 [1983] をもとに、新たな資料を扱っている百濟 [1990] での成果も取り入れつつ、百濟氏の論考を引用する形式で、随時、筆者の補足を加えることにする。

#### 3.1 構成上の特徴

①経文 「既知の玄賛漢本は、経文を「経……至……」の形式で法華経文の中間部を省略して引用する<sup>14)</sup>。これに対しウイグル訳本は、省略せずに経文【全文・百濟 [1990: 14] を引用する点にまず特徴が見られる。…因みにチベット訳玄賛は、漢本と同じく中間の語句を省略して経文引用する。】（百濟 [1983: 197]）。

②朱書 「経文の引用にあたって、資料IIは原則として経文を朱書する。…しかし、おそらく書写者の失念に由ると思われる朱書されない例も若干認められる。…ただし資料IIIは経文を朱書しない。既発表のウイグル仏典に見るかぎり、朱書は「佛」、「菩薩」などの語に用いられる場合と偈頌の第一句に用いられる場合などが知られていたが、経疏にあつては経文引用にも適用されたことが確かめられた。」（百濟 [1983: 197-98]）。

③分段 「玄賛漢本は経文を分段し順次に注釈の賛を付す。ウイグル訳本は…この漢本の方式に従って訳出している。しかしながら…独自の分段を行なった跡が認められる。例えば文例 C【資料総覧No. 21】では、…r6に続くべき経文三偈（経p. 6c28-7a4）とその賛（賛p. 708b10-13）、大正蔵経本にして十行分は省略されている。さらに後続のウイグル訳経文r6-v8は、漢本では二分された文（賛p. 708b14, 27）を一個所にまとめて訳したものである。さらに資料II No. 59【資料総覧 No. 30】と資料III No. 29【資料総覧No. 43】は経文の引用のみで成っているが、No. 59は漢本（賛p. 748a20-b21）三十行中に五分された経文を、No. 29は漢本（賛p. 824b29-c27）二九行中に八分段された経文をそれぞれ一個所にまとめて訳したものであり、分段経文の間にあるべき注釈の賛は訳されていない。またNo. 47【資料総覧 No. 23】では、r1は経の引用で（賛p. 709c23に当るが、r2は先行の賛（賛c21-22）へもどり、r3以下は（賛c24-28の賛へ移った



跡が認められる。」(百濟 [1983: 198])、「**写本C**【資料総覧 No. 15】では、『玄賛』4か所に分段された経文を集めまとめて訳しており、本来その間にあるべき賛(大正大蔵経で約30行)は訳出されていない。また**写本D**【資料総覧 No. 18】では、賛の一部を省略して翻訳している。」(百濟 [1990: 14])、「右に見た漢本との分段の差異はどうして起ったか? 写本の断片性ゆえに判然としないが、筆者は今のところ“本来数分段された経とその賛を時には経は経で賛は賛でまとめて訳したり、時にはあまり重要でない賛を省略したり、時には経と賛を大きく省略する”のような訳法がウイグル本に採用されたためらしいと考えている。とにかく**ウイグル本が漢本とは異なる分段法を採っていることは確か**である。」(百濟 [1983: 198])。

④**分巻** 「漢文玄賛は十巻本末、計**二十巻**の書である。ウイグル本資料IIの写本のいくつかには**巻数と葉番号が残っており**、今、巻の相互関係を見てみると、…【詳細は下記の図表にまとめたとおり】

Chin. Text		Tib. Text	Chin. Text	Uig. Text		
十巻本	品	品	二十巻本	巻	葉番号	品
巻第一	1	1	一本 (1)	missing		
			一末 (2)			
二本 (3)						
二末 (4)						
巻第二	2	2	三本 (5)	4	-36-60-	1
三末 (6)			5			
四本 (7)				missing		
四末 (8)						
巻第五	3	3	五本 (9)	8	-103-	3
五末 (10)			-163-			
巻第六	4	4		六本 (11)	unknown	
六末 (12)						
巻第七	5-6	5-7	七本 (13)			
	7		七末 (14)			
巻第八	8-9	8-11	八本 (15)			
	10-11		八末 (16)			

卷第九	12-14	Not translated	九本 (17)
	15-17		九末 (18)
卷第十	18-23		十本 (19)
	24-28		十末 (20)

この分巻法はウイグル本独自のものと考えねばならない。つまりウイグル本は、漢本のような本末方式を採らず通巻で巻番号を与えた、しかし全体としての巻数は漢本に比して少なかった、と考えねばならない。このような巻数減少の原因は、おそらく前項【③分段】で記したウイグル本の時として経や賛を省略する訳法にあったと考えられる。」(百濟 [1983: 198-99])、

⑤省略 「窺基の玄賛は、『爾雅』、『広雅』、『玉篇』、『切韻』、『説文』などを自在にあやつる難文であり、美辞麗句や音声学的並びに意味論的説明などの中国的粉飾が随所に見られる。これらの文をウイグル訳することは困難であったのだろう。チベット訳本と同じくウイグル訳本もこれらの訳をたいてい省略している。」(百濟 [1983: 199])、

⑥増補 「例えばNo. 44【資料総覧 No. 13】では、原文「迦留陀夷埋足糞壤」について迦留陀夷 (Skt. Kālodāyīn ; Uig. kadoṭayi) の事跡をウイグル文で七行、また後続の「鶖掘魔羅獄火焚身」については鶖掘魔羅 (Skt. Aṅgulimāla ; Uig. angulamali) の説話を三行以上付加している。…中には教義的な補足説明に至った箇所もあり、仏教学的にも興味深い。…右のような増補は読者の理解を助けるための補足であったのだろう。」(百濟 [1983: 199])、

⑦誤解 「ウイグル訳者あるいは書作者の誤解と考えられる箇所が文例D【資料総覧 No. 42】に見られる。すなわちv3-6は経文「長者聞已 驚入火宅 方宜救済 令無燒害」(經p. 14b7-8)の偈の訳であり、漢本「初一頌半」に当り、またv9の「子ども」で代表された文は経文「告諭諸子……」(經p. 14b9-)の偈を指し漢本「後二頌半」に当たっている。要するにウイグル本は「初一頌半」と「後二頌半」に対し実際の経文を補入しているわけだが、漢本の前後の文を検討すると、ウイグル本の指示する偈は漢本に比して一偈ずれているようである。これが誤解であるとするれば、それは、ウイグル本が前項⑤【③分段】で述べたように「長者聞已……」の偈と「告諭諸子……」以下の偈をまとめて訳したために、分段の差が生じ、「初一頌半」の「初」の指すところに一偈分のずれが起ったことに由ると考えられる。」(百濟 [1983: 199-200])、

### 3.2 訳出の背景

⑧**出土地** 百濟氏は研究の初期段階では「資料Iはヤルホト出土【トルファン地方であり・百濟 [1983: 201]】。資料II及びIIIの正確な出土地は不明だが【敦煌地方と考えられる・百濟 [1983: 201]】」（百濟 [1983: 200]）と指摘するに止まっているが、研究の進展に伴って、とくに**資料II**については「パリのギメ美術館および国民図書館、ストックホルムの民族学博物館、京都の藤井有鄰館および羽田写真資料、蘭州の甘肅省博物館には、もともと同一本であったウイグル写本の離片が蔵されている。…これらの写本資料の出所は、P. ベリオ教授が181窟 (Grotte 181) という番号をつけたモンゴル元朝時代の造営になる洞窟、すなわち敦煌の現464窟に相違ない。…本稿で取り扱った『玄賛』写本もそうした敦煌の現464窟に由来するもので、13～14世紀の敦煌地方で流通した仏典の片鱗であると考えられる。」（百濟 [1990: 14]）と具体的な出所を提示し、その上「写本の種数・点数、出土状況からすれば、玄賛はウイグル人仏教徒間にかなり盛行していたと考えてもよいであろう。」（百濟 [1983: 201]）と推察している。

⑨**書写年代** 「三資料に用いられたウイグル字体から書写年代を探る確実な方法は未だ見当らない。しかしながら筆者の持つ字体の年代についての見解及び実見調査した資料IとII（甲）の紙質などから推定を試みれば、Iは一一～一二世紀、II（甲）は一二～一四世紀ごろと察せられ、書写はその頃に為されたと考えている。」（百濟 [1983: 200]）。

⑩**伝訳経路** 「分段、分巻、訳文の体裁などの近似性から見て、当本が漢本からウイグル訳されたことはほぼ確実であろう。少なくとも極端な省訳である現存チベット訳本を経て重訳されたとの想定は困難である。」（百濟 [1983: 200]）。

⑪**Tib. Text との関係** ことに資料Iとの対比において百濟氏は「玄賛にはこれでTib. とUig. の二訳の存在が確認できたことになるが、Tib. 訳本は<sup>[5]</sup>、山口益博士も指摘する如く問題が多い<sup>[6]</sup>。本稿が以下でTib. 本との対照を期し得ないのは、そうした問題点の一、Tib. 本が漢本を「きわめて大胆な取捨選択の下で大きく要略」した省訳であることに由る。当該箇所は北京影印版のVol. 107 p. 4-1-5～7で、Tib. 訳は「如是我聞、生信也。信受奉行、生智也、信為能入、智為能度。信為入法之初基、智為究竟之玄術」（T p. 662a16-18）を訳した後、大正蔵にして約50行を省略し、「如是之言、依四義転……」（p. 662c7 f.）の訳へ移っている。当Uig. 本が抄訳する個所（T p. 662 a 20-c 5）はこの省略部分に当るからである。」（百濟 [1980: 51]）と述べ、資料IがTib. Textからの重訳でないことを指摘している。加えて「資料IIIのNo. 29は漢本九卷本中の第十四品に当り、ウイグル本は漢本十卷本末全巻の訳を容していたと推定できよう。因みに現存のチベット訳玄賛は八巻末中の第十一見宝塔品までが残っている。」（百濟 [1983:

199) という指摘からは、資料IIIも Tib. Textからの重訳でないことが窺われる。ちなみに、ウイグル語訳『法華経』は断片しか伝わらないが、それらすべてが Chin. Textを基礎において、ウイグルで改変されたものであることが指摘されている<sup>17)</sup>。

⑫**翻訳年代** 「蘊」「根」「情」に対する訳語がアビダルマ系論書に見られる訳法とは異なり、『金光明経』ウイグル訳本に見られる訳法と一致することから、以下のように推定する。「『金光明経』はSingqu Sāli【僧古薩里】という人物によってウイグル訳されたものであり、その年代については後唐時代の九三〇年頃とする A. von Gabain 女史の説と北宋時代(九六〇～一一二七)におく馮家昇氏の説とがある<sup>18)</sup>。…とほしい訳語例から推定することが許されるならば、玄賛は『金光明経』と同時代か、あるいはそれと余り離れていない時代にウイグル訳されたらしい可能性を記しておきたい。因みにSingqu Sāliは、玄賛の著者・窺基の師である玄奘の伝記、すなわち『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(慈恩伝)をウイグル訳した人でもある。玄奘から窺基へと続く法相唯識学の系譜を考慮すれば、「玄賛は、法相唯識学の流れをくむSingqu Sāli、あるいは同学派の他の人物によってウイグル訳された」との想定も意味を持つのではあるまいか。」(百済 [1983: 201])。また後に「写本A【資料総覧 No. 7】は全文が教義的補足説明であって、その内容は唯識学的である。筆者は1983年の論文で「ウイグル訳者は法相唯識学の系統をくむ人物ではないか」との想定を提示しておいたのだが、その可能性は一段と高まったと思う。ウイグル訳者のこうした恣意的翻訳態度は、われわれ現代の解読者を大いに惑わすものではあるけれども、反面ではまた訳出の思想的背景を探るうえで貴重な情報を提供するものであることは否めない。」(百済 [1990: 14-15])と加えている。

### 3.2.1 題記

ウイグル語訳『玄賛』の3種の資料からは、文献独自のタイトルを見出すことができない。ただ「資料Iは冒頭(一行目)で【以下の本文・和訳は、百済 [1980: 52, 57] による】

本文

(1) vapxuaki atly nom čäčäki sudur-da sözlâyür, kirtgünč on törlüg yörüglüg (2) bolur tip,

和訳

(1) 『法華経』という名の“法の花”の経で説く。「信は十種の義あるもの(2)となる」と。

と記してから本文が始まるが、後読の本文は法華経ではなく玄賛そのものであるという一見不可解な事実がある。」(百済 [1983: 202])。

しかしながら、ギメ美術館所蔵の資料II丙のかつての所持者、すなわちテ [ミュ] ル・カヤ

によるものと思われる奥書(資料Ⅱ丙 No. 63322 G)からは「“疏” 広積」という文言を見出すことができる。

筆者のここで注目したいところは「広積」であるが、その考察に先立って、百濟氏による該当箇所の論説を以下に引用する。

「本稿でとりあげたギメ美術館所蔵の7葉の写本のうち、最も興味を引くものは写本G【資料総覧 No. 41】かと思う。【以下の本文・和訳・英訳・注解は、百濟 [1990: 13] による】

#### 本文

1: bars yil onunc̄ ay toquz otuz-qa adaš qay-a tapsız bolmiş-ta

2: mn tām [ü] r qay-a ada-sī kiđip tār̄k tavraq öngädzün saqinč̄in

3: bo 法華經 sudur ärdini-ning šuu king yörügin oqıyu täğintim 了也 善哉

#### 和訳

(1) 寅の歳の十月二十九(日), アダシュ・カヤが不快となった時, (2)私, テ [ミュ] ル・カヤが, 「彼の難が去り, 速やかに回復せよ」との思いをもって, (3)この『法華經』という法宝の“疏” 広積を読みたてまつった。了也。善哉。

#### 英訳

(1) On the 29th (day) of the 10th month in the Tiger-year, when Adaš Qaya became indisposed, (2) I, Tä [mü] r Qaya, —wishing that his danger may go away and he may recover soon and quickly— (3) have ventured to recite this COMMENTARY or “Wide Meaning” of the SADDHARMAPUṆḌARĪKA-SŪTRA. COMPLETED. GOOD!

#### 注解

G-3 šuu < Ch. 「疏 (shu)」 “commentary book” = Uig. king yörüg

この奥書きの語る所によれば, 寅歳<sup>19)</sup>の10月29日, アダシュ・カヤなる人物が健康を害したので, テ [ミュ] ル・カヤなる人物が, 彼の病氣平癒を願ってこのウイグル訳『玄賛』を読んだ, という。

ここに記載された「寅歳」の記述のみで, 当写本読誦の正確な年代を判定することは不可能である。しかしながら, 上記1【⑧出土地】の項目で記したように, この年は13~14世紀のうちに設定されるべき或る「寅歳」であろう。

また, ここに登場するアダシュ・カヤとテ [ミュ] ル・カヤの二人の関係の詳細を, 奥書きの文中や他のウイグル語資料中に探査し論証することは, 今は資料不足のため望めない。だが, 両人が13~14世紀の敦煌地方に住まうウイグル人であって, 仏教的縁故に結ばれた兄弟や親族縁者であったろうことは, 十分に窺える。

ところで、奥書きに見える『玄賛』の題目は、漢字「法華経」と中国音「疏」を交えて、「『法華経』という法宝の“疏”広釈」と表現されている。この表現の背景には、中国仏教文化の強い影響を受けた社会的環境を読み取ることができる。だが、何故に読誦の対象が『玄賛』なのであろうか。換言すれば、『法華経』そのものではなく、その注釈書である『玄賛』を、平癒祈願のために読誦したのであろうか。経力を願うならば、『法華経』そのものの読誦で充分ではないか。何故に、難解な教義を含む、しかも膨大な量の注釈書である『玄賛』が、読誦の対象として選ばれたのか。こうした疑問を、従来提起されてきた「法華経信仰」という一言だけで解決するには、どうも物足りなさを覚える。」(百濟 [1990: 15])

思うに「広釈」という言葉の意味から推察するならば、ウイグル語訳テキストは経文を翻訳するに際して、漢文テキストやチベット語訳テキストとは違って、間を省略せずにそれを補って全文を訳す(広釈)傾向がみられることから、「疏」ではあれども、「経」そのものの役割をも果たしていると考え、「疏」の読誦であっても、「経」と同様の功德が得られると思ったのではないだろうか。すなわち、ここでいう「広釈」とは、経文全文を補って訳していることを指しての意味合い(表現)だったのではあるまいか。

### 3.2.2 流布の背景

流布の背景については前項での百濟 [1990] からの引用に続けて以下のようにある。

「この疑問については、1983年の拙論【百濟 [1983: 201-02]】で、先学の研究成果をふまえておおよそ次のような仮説を提示しておいた。

窺基の著した『玄賛』は、『法華経』注釈書としては、中国内地において正統的とはいいがたい。ところが、敦煌の書窟(現代の第17窟)発現の漢文『法華経』注釈書類のうち、4割は『玄賛』と『玄賛』関係のものであって、しかも8世紀中頃以後になると『法華経』注釈書のほとんどは『玄賛』で占められる事実がある。こうした『玄賛』流行の背景には、曇曠(8世紀前半)の影響があるのではないか。すなわち、長安の西明寺で窺基系統の唯識学を学んだが、折りからの戦乱のため故郷の河西へ帰り、敦煌で盛んに著述活動を展開した曇曠の学問的影響を想定できるのではあるまいか。

一方、『法華経』注釈書のウイグル訳本としては、今のところこの『玄賛』しか見つからないし、このウイグル訳『玄賛』はトルファン地区にまで影響を与えている。『玄賛』のウイグル訳がなされたのは、せいぜい早く見積もっても11世紀であろうが、ウイグル仏教内部における『玄賛』中心の在り方には、中原仏教からの影響を想定するよりも、上に述べたような敦煌仏教内における漢文『玄賛』流行の余波を被った、と想定した方が無理のないように思われる<sup>(2)</sup>と。

これは、敦煌における『玄賛』を中心とする『法華経』研究が、敦煌を中心とする後世のウ

イグル仏教の『法華経』研究～信仰の在り方に影響を与えたのではないか、という趣旨の仮説であった。敦煌仏教は、かの有名な書窟の封閉（11世紀前半）をもって終焉を迎えたわけではなく、「それからの敦煌仏教」があったはずである。ギメ美術館所蔵の写本G【資料総覧 No. 41】の内容は、こうした敦煌仏教の13～14世紀における在り方を如実に物語るものであるのかも知れない。今後の研究過程で常に念頭においておきたい仮説である。」（百濟 [1990: 15-16]）。

#### 4 Alp Qayaに送られた法華経の注釈書

以上、ウイグル語訳『玄賛』に対する百濟氏の研究成果を総括した。ほとんどが氏の論考のそのままの引用であって、筆者によって付け加えられた考察はわずかばかりに過ぎない。

ただ、関連資料の整理中に思わず見入ってしまうほど大変に興味深い「一文」が目飛び込んできたため、該当する森安孝夫氏の下記の三つの論考を総合し、以下に示しておきたい。

- ①森安 [1982]: An Uigur Buddhist's letter of the Yüan Dynasty from Tun-huang 敦煌 (Supplement to "Uigurica from Tun-huang"), *Memoirs of the Research Department of the Tôyô Bunko*, No. 40, 1982, pp. 1-18.
- ②森安 [1983]: 「元代ウイグル仏教徒の一書簡——敦煌出土ウイグル語文献補遺——」(護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983年6月、pp. 209-231)。
- ③森安 [1985]: 「I ウイグル語文献」(山口瑞鳳責任編集『敦煌胡語文献(講座敦煌6)』大東出版社、1985年8月、pp. 1-98)。

P. 4521の裏表紙<sup>[21]</sup>に元代ウイグル仏教徒の一書簡が隠されていたことが森安 [1982: 83; 85]によって明らかとなった<sup>[22]</sup>。以下森安氏の訳文(森安 [1983: 211-13; 85: 98])を引用する。

1. …………… (相手に対する挨拶) …………… 2. …………… 君は。私SY'N<sup>[23]</sup>は(以前に) 会った時のように四(または九) <//////////s(ä)n m(ä)n SY'N körmiš-täki-(č)ä t [örtünč ; oquzunč]> 3. 月二十何日までは元気でやっています。〔以下空白〕 4. さて申し上げます, Alp Qaya<sup>[24]</sup>法友に。君にも…… (は?) 5. きれいな手仕事を見つけた。生まれたら死ぬべきは現世 6. の定めである。君にそのような仕事を見つけ…… 7. 私にもそのように見つけた。何をすべき……。 8. また申し上げます, Alp Qaya法友に。君は沙州にいる <yana söz-üm alp q(a)y-a nomdaš-qa s(ä)n šaču-täki> 9. Yoqayのなし終えたこと(を)なし終えてないことを申告[させ], …… 10. の力で, 返答がたとえどうであれ, それを私に 11. [書いて?] 送れ。怠慢になるな。Quli Tu…… 12. 馬が残っていて繁殖している。経典を読んでいるの 13. か, いないのか, (いずれにせよ) それらを私に…………… 14.

送れ。他の用件があるなら君は手紙を 15. 送るがよい。また申し上げます, Alp Qaya に。  
*Buyan Tämür*…… 16. 一つの完全な C'KY<sup>25</sup>石の付いた中国の 〈tavvaç〉 …… 17.  
 ……**一部の法華経の注釈書**, 一つの…… 〈KWYL'N bir vuu vapquaki<sup>26</sup>-ning açi'yi<sup>27</sup>  
 bir Y/////////〉 18. 安蔵博士の翻訳した *Nāmasaṃgīti* 〈antsang baqši-ning aqdarmiş  
 namasangid〉 19. 一つの大般若経の心経, 以上の諸経典を〔私は〕**送った**。20. 調べて受領  
 せよ。わかったね。これらの経典と他の諸経典…… 21. ……  
 親愛なる君。〔以下空白〕

差出人の氏名は完全には読み取ることができないが（ともかく資料II丙 No. 63322 Gにおいて示されるテ [ミュ] ル・カヤではない）、文中にアルプ・カヤ (Alp Qaya) に対して「一部（完本か）の法華経の注釈書」（I. 17）を送ったことが記されている。

この注釈書の原語を確定することは難しいが、しかし、ウイグル語訳『玄賛』である可能性を排除することはできないため、今後、ウイグル語訳『玄賛』の敦煌への流入の問題を考える上で、貴重な手がかりになると考えられる。

## 注

- (1) 百濟氏は後に「『玄賛』のウイグル訳がなされたのは、せいぜい早く見積もっても11世紀であろう」（百濟 [1990: 15]）と主張を変えている。
- (2) 引用は原文のとおりであるが、**bold**・underline・【…】括弧内は筆者による補足である。以下同様。
- (3) 「寸法は29×212cm。一紙29×41.5cmの紙を貼り継いだ卷子で、巻首と巻末は不完紙である。不用になったText A（密教系仏典）を修繕し、その裏面白地にText Bが書写されている。」（百濟 [1980: 51]）。
- (4) 「W. Bang-A. von Gabain, *Türkische Turfan-Texte V* [SPAW 1931, p. 323-356] (Berlin 1931) : *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der Deutschen Turfan-Forschung II* (Leipzig 1972) p. 99-132.」（百濟 [1990: 16 (n. 2)]）。
- (5) 「裏面冒頭には、本文と無関係な「これは沙州の紙である」というUig.文が記され、紙質は“かなり繊維の粗い紙 (ziemlich grobfaserige Papier)”である。この粗悪紙がその記事の如く沙州・敦煌産の紙であることは、一紙の寸法が書物用の小尺ではなく、通常の尺に依った1×1.5尺である点からも確められる。藤枝晃博士の研究で明らかにされたように【藤枝晃『文字の文化史』（岩波書店 1971）p. 151・百濟 [1980: 51 (n. 3)]】、この種の紙は8世紀後半に吐蕃 (Tibet) 族が敦煌地方を占領して以後のもので、中国内地産上質紙の輸入が困難となったため敦煌で自産されたものである。」（百濟 [1980: 51]）。
- (6) 「『ウイグル語訳『妙法蓮華経玄賛』(1)』『仏教学研究』36 (1980) p. 49-65.」（百濟 [1990: 16 (n. 3)]）。
- (7) 「資料II-乙は、故羽田亨教授が保管されていたウイグル資料の焼付写真集に見出される三二葉分・六



- 四枚の写真。出土地・現所蔵者などは不明。完葉はなく、ほとんどが著しい断片。資料IIに収める理由は、特徴ある片面八行書き貝葉形紙本、経文・天地界線・紐穴円形の朱書、楷書体の筆法、葉番号の書式、紐穴・行・界線などの比率の検討に基づき、資料II-甲と同一写本の離れと断定したことに由る。」（百濟 [1983: 186]）。
- (8) 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』（1983）p. 185-207.」（百濟 [1990: 16 (n. 4)]）。
- (9) 「“Uigurische Fragmente eines Kommentars zum Saddharmapundarika-Sūtra”, *Der türkische Buddhismus in der japanischen Forschung*, herausg. von J.P. Laut—K. Röhrborn (Wiesbaden 1988) p. 34-55, Facsimiles: 102-106.」（百濟 [1990: 16 (n. 5)]）。
- (10) 「資料IIにあたるストックホルムの民族学博物館ならびに羽田写真資料中に見出だされる計33葉と、貝葉形紙本・紙質・寸法・朱書きの界線と紐穴円形・界線と円形の比率・書体・片面8行書きなどの点で全く同じ特徴を示す写本断片」（百濟 [1990: 2]）。
- (11) 百濟氏は羽田写真資料中、3点（Nos. 34, 61, 73）の図版を公開するにあたり、羽田明氏の許可を得ているようである。cf. 百濟 [1983: 186]。
- (12) 「Kōgi Kudara, *A provisional catalogue of Uigur manuscripts preserved at the Ethnographical Museum of Sweden* (Ms. 1980)」（百濟 [1983: 205 (n. 8)]）。
- (13) 本資料については、張娜麗「羽田亨博士収集「西域出土文献写真」について」（『お茶の水史学』第50号、お茶の水女子大学、2006年12月、pp. 1-64）に詳しい。
- (14) 「渡辺瑞敞「藏文法華経註釈について」『大崎学報』九二号（一九三八）二一七～二二三頁によれば、同氏が“支那本”と呼ぶ写本（中村不折本か）は「経文引用は全文を引く」とあるが、筆者は確め得なかった。」（百濟 [1983: 205 (n. 10)]）。
- (15) 「*Dam-paḥi chos puṇḍa-ri-kaḥi ḥgrel-pa* : Tohoku No. 4017, Otani No. 5518.」（百濟 [1980: 52 (n. 4)]）。
- (16) 「山口益「チベット仏典における法華経——法華玄賛のチベット訳本について——」（金倉円照編『法華経の成立と展開』；平楽寺書店1970）p. 675 ff.」（百濟 [1980: 52 (n. 5)]）。
- (17) Abdurishid Yakup（阿不都熱西提・亜庫甫）『*Studies in Some Late Uighur Buddhist Texts Preserved in Russia*（ロシア所蔵後期ウイグル語仏典の研究）』（京都大学、2000年9月）参照。
- (18) 「手近な紹介については、護雅夫「（資料紹介）ウイグル語訳金光明最勝王経」『史学雑誌』七一編九号（一九六二）六一一～六一八頁を見よ。」（百濟 [1983: 205 (n. 14)]）。
- (19) ウイグル文書のなかには、「寅年」を記すものはいくつかみられる。例えば、Or. 8212-109（至元十〇年虎歳 [1350] 六月四日・森安 [1985: 5]）、Or. 8212-161（虎年二月十五日・森安 [1985: 33]）、TM 14（U 4759）（壬寅年 [1302] 第七月・森安 [1983: 222]）などがある。
- (20) 「そう考えれば、ヤルホト出土の資料Iの巻頭に本文と同じ筆跡で「これは沙州の紙である」（bo šačiu kagdā-si ol）と記入されていることは、紙のみならず玄賛も敦煌からトルファン地方へ伝わったことを

暗示してはいないか。』(百濟 [1983: 202]).

- (21) 「裏表紙…ウイグル文(草書体、中字)の書かれていた反古紙(淡い茶褐色、中手の薄い方、透し筋あり、中質)と別の白紙を糊で貼り合わせて厚手にしたもの。反古紙の紙背の空白を外側にしているので、ウイグル文は光に当てて透かしてみない限りみえない。このウイグル文については別に稿を草した。〔補註〕を見よ。」(森安 [1985: 7])、「ウラ表紙……一葉 (cf. Tekin, Tafel 41右&42)。反故になったウイグル文の文書と別の薄手の白紙(二枚?)をノリで貼り合わせて厚手にしたもの。ウイグル文の大部分は光線に当てて透視しないと見えないが、一部(紙が本の大きさより大きくてはみ出したため折り返されてノリ付けされた部分)はその裏側が透けてみえる (cf. Tekin, Tafel 41右の右端と下端)。」(森安 [1983: 210]).
- (22) 「私が本稿に取り上げるのは、実はウラ表紙の中に隠された一文書の方である。先にみたように、この文書は他の紙と貼り合わされ、且つ一部は折り重ねられているため、現状のままでは写真を撮ることは不可能である。私は電気スタンドの光で透視しながら一語ずつ丁寧に手写していったが、紙が折り重なって文字がダブっている所は完全には書き写せなかった。また、光線が通らず全く読めなかった部分もある。それでも一応の筆写を終え、あらためてそれを解読してみたところ、この文書は手紙文であることが判明した。以下に示すのは、私が読み取り得た限りでのテキストのローマ字転写と、現段階における試訳である。将来いつか、このウラ表紙が分解されて、文書の全容が明らかになれば、よりよい訳文が与えられるであろうが、今は一刻も早い史料の公表こそ重要と考えてここに紹介することにする。」(森安 [1983: 210-11])、「本稿より後に書かれた補遺及びその英訳が既に出版されている。本稿と一体を成すものなので是非参照されたい。「元代ウイグル仏教徒の一書簡——敦煌出土ウイグル語文献補遺——」、『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京、一九八三、二〇九—二三一頁。T. Moriyasu, “An Uigur Buddhist’s Letter of the Yüan Dynasty from Tun-huang (Supplement to 《Uigurica from Tun-huang》)”, *Memoirs of the Research Department of the Tôyô Bunko*, No. 40, 1982, pp. 1-18. なお、この補遺(とくにその英訳)の出版が契機となり、パリ国立図書館東洋写本部長コーエン女史 Madame Monique Cohen (セギー女史の後任)の指示のもと、P四五二一文書のウラ表紙の分解作業がすみやかにおこなわれ、白日の下にさらされた元代ウイグル仏教徒の一書簡の写真が私のところに送られてきた。それにより、補遺(和文)で提示した試訳を次のように訂正・増補することができた。」(森安 [1985: 98]).
- (23) 「SYN’は *körmis* にかかる副詞ではなく、「私」即ち手紙の差出人の名前であろう。SY’Nではなく SYN’ (*Sina*) と読むべきかもしれない。」(森安 [1983: 214 (n. 2)]).
- (24) *Qaya* については、森安 [1985: 85] に「ハミルトン氏はこの *qaya* をモンゴル期に頻出する一種の称号と考えている (cf. J. Hamilton, “Un acte ouïgour de vente de terrain provenant de Yar-khoto”, *Turcica*, I, Paris 1969, pp. 50-51)。*qaya* とあれば必ずモンゴル期というふうに限定するわけにはいかないが、少なくとも、この *qaya* という要素を含む人名が頻出するのがモンゴル期の特徴であることは認めてよい。

『元史』や『元文類』などの漢文史料では海牙（布魯海牙・牙兒八海牙・吉台海牙・阿里海牙・忽失海牙・土堅海牙・月舉連赤海牙・阿禮海牙・脱烈海牙・阿思蘭海牙・廉惠山海牙・阿魯渾海牙・阿塔海牙）、海涯（小雲石海涯・忽都海涯・八三海涯）、凱雅、哈雅などと写されている。尚、ここに列挙した人物のほとんどはウイグル人である。他方、カラ氏によって解読された敦煌千仏洞内の壁面に記されたウイグル語銘文（落書き）中にも、この qaya のついた人名がいくつもみえる（cf. G. Kara, “Petites inscriptions ouigoures de Toueng-houang”, *Hungaro-Turcica, Studies in Honour of Julius Németh*, Budapest 1976, pp. 55-59.）とある。

- 25) 「不明。čäkü なら七宝の一つである碑磬（貝）を指す。cf. L. Ligeti, “Un vocabulaire sino-ouïgour des Ming”, *Acta Orient. Hung.* XIX, Budapest 1966, p. 151.」（森安 [1983: 215 (n. 14)]）。
- 26) 「中国語「法華経」の借用語。Bernhard Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Kungsbäcka 1972 (Repr. from the *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 29, Stockholm 1957) …の再構成によれば、「法華経」の中古音は *ɣwəp-ɣwə-kieng* (No. 642k+No. 44a+No. 831c) である。」（森安 [1983: 215 (n. 17)]）。
- 27) 「従来知られている *ačiy* の一般的な意味は「贈り物」であるが、ここでは適当でない。私は *ač* 「開く」よりの派生語で「解説；註釈，疏」ではないかと考えて百済康義氏に書簡で意見を求めたところ、賛同を得た。氏によれば，“*abidarim šastr-taqi čin kirtü tözlüg yörüglärning kingürü ačdači tikisi*” 「アビダールマ論における真実性の義を広く開くところの *Ṭikā*」 = 「阿毘達磨俱舍論実義疏」と、「疏」を *ač* を用いて訳す実例があるという（*Or.* 8212-75A, 1a 2.）（森安 [1983: 215-16 (n 18)]）。

## 【キーワード】

ウイグル チベット 慈恩基 『妙法蓮華経玄賛』 『妙法蓮華註』